校長室だより～燦燦～ №２３

アクティブラーニング考

2019.12.11

先日、ある高等学校に行ってきた。「アクティブラーニングの視点による研究授業公開」に参加するためである。出かけた理由は５つある。

① 国語の先生のうち２人を知っている。
② 高校の授業を参観する機会が少ない。
③ 学習指導案を含めて配布資料を本校の先生方に提供できる。
④ 車に乗って１時間あまりで行ける。
⑤ アクティブラーニングの視点による授業を見ることができるかもしれない。

私の知り合いの先生が授業を提供してくれればよかったのだが、そうはいかず、若手の２名の先生が国語の授業を行っていた。一つは、現代文の授業で小論文を書く力をつけるものである。もう一つは、古典で「四面楚歌」の状態にある「項羽」の心情を考える授業であった。

小論文のほうは、教師の出番が少なく、生徒が考え、書く、話し合う時間が十分確保されていた。また、授業者は、この時間の学習内容における小論文を書く際のポイントを簡潔に生徒に示していた。明らかに、教師の一方的な講義スタイルの授業ではなかった。

一方、古典の授業は、授業の計画書、設計図である学習指導案によると、５０分のうち４／５は以前から行われてきた授業スタイルで、残りの１０分あまりが、「項羽」の心情を個人で考え、グループで考えを交流し、発表するというものだった。アクティブラーニングの視点から考えると、この１０分あまりの時間が大切である。授業を参観する前から、「これは時間がなくなりメインの学習ができなくなるパターンだな」と危惧された。

実際の授業はというと、案の定、古典の本文を読む、書き下し文にする、口語訳をするという旧態依然とした３０年前のスタイルが目の前で展開された。昔と若干違っていたのは、プリントを使っていたことと、座席が最初から最後までグループ形態だったことである。プリントに本文が最初から印刷されていた。時間節約のつもりかもしれないが、この本文こそノートなどに直接書いたほうがよい。「視写」の効果が期待できる。座席はグループになっていたが、その必要性はさほどなかった。

私が危惧したメインの学習時間は、ラスト３分のみだった。当然終わるはずがない。したがって、私のような参観者にとっては、アクティブラーニングの視点からの授業は結局見ることができなかったことになる。

授業後の協議会で授業者に聞いてみた。すると、今のやり方がよいとは思わないが、どうしていいかわからないということだった。結局、自分が高校時代に受けた授業スタイルでやっているというのである。こういった先生は多いのではないだろうか。現状に満足はしていないが、現状を打破することもできない。目の前の生徒はどうかというと、私が見た生徒たちは、意欲的に学習していた。私はつい考えてしまった。「この授業でこれだけ生徒が一生懸命やるのならば、先生方は授業を改善しようなどとは本気で思ったりはしない」と。

今回の古典の授業であれば、授業を受けなくても、一人で参考書などを使って十分に学習をすることができる。極論を言えば、わざわざ学校に来て学んでいる理由は見当たらない。果たして、これでいいのだろうか。多少ヒートアップしてきた。まだまだ序論である。冷却するために本論は次号に譲ることとする。